

# マリオネットに花束を

猫又 唯

梶山俊孝（かじやま よしたか）

郵便配達員を装う謎の人物。

水戸佳代（みと かよ）

亡き父の跡継ぎとして花屋を経営している。

石田文香（いしだ ふみか）

佳代の親友。妊娠中。保育士をしていたが、妊娠を機に辞めた。

石田陽人（いしだ はると）

文香の夫。佳代の初恋相手。アプリ開発企業に勤める。

佐倉弓弦（さくら ゆづる）

佳代の花屋でアルバイトをしている。芸大院生。

山下美和（やました みわ）

新婚。陽人の会社の後輩。

並木京子（なみき きょうこ）

花屋によく来る。佳代の昔からの知り合いおばあちゃん。

前田敦（まえだ あつし）

佳代と文香の元担任。

あらずじ

「そろそろお気づきでしょう、その花がもたらす効果に。」

亡き父の跡を継ぎ花屋を経営している佳代は、親友である文香と初恋相手の結婚から、彼女に対して真っ直ぐ向き合えなくなっていた。

そしてある日、文香の妊娠を告げられる。同じころ、佳代の周りに不審な男がちらつくようになり、彼女たちの人生が動き始めるが……。

ドライフラワー。それは、理想の世界へいざなう切符である。

理想が現実か？現実が理想か？

今日も、誰かが囚われている。子どものような、理想のはなし。

舞台

・花屋の店先

(現実) 勿忘草の綺麗な植木鉢。美和が割ってからはない。

(理想) 勿忘草の綺麗な植木鉢。美和が割ってからも綺麗なままそこにある。

1場 オープニング

薄暗い舞台。不気味な雰囲気。儂げな音楽が流れている。  
佳代が現れる。店の奥にある花を一輪手にする。  
そこへ、俊孝がやってくる。

俊孝「やはり、必要なんでしょう。」

佳代「一つ聞いていいですか？」

俊孝「何なりと。」

佳代「あなたは戻れなくなった側。違いますか。」

俊孝「面白いことをおっしゃる。」

佳代「ずっと閉じ込められているんでしょう、あなたの……」

俊孝「ここは、現実ですよ、佳代さん。」

佳代「私は誰かの人形にはなりたくありません。誰かを人形にもしたくありません。」  
俊孝「……」

佳代「そろそろ帰ります。夜遅いですから、あなたも気を付けて。」

佳代、去る。

俊孝「佳代ちゃん……。」

少し暗くりズミカルな音楽が徐々に大きくなる。

舞台上に花が次々と放り込まれる。

音楽に合わせて、誰かに操られているようにその花を一心不乱に拾う。

徐々に拾うスピードが間に合わなくなり、花で埋め尽くされる。

その場にうなだれる俊孝。

暗転。

花屋。店先で談笑する佳代と文香。

佳代「男の子？女の子？名前はもう決めたの？予定日はいつ？体は大丈夫？」

文香「ちょ、ちょっと佳代。落ち着こっか？」

佳代「だってびっくりしちゃったんだもん！なんか嬉しくなっちゃて。」

文香「もう、陽人くんよりうろたえてる。」

佳代「あはは。仕事辞めたって聞いたときは何事かと思ったけど、こういうことだったんだね。」

文香「うん。佳代ならいいかなって思ったけど、落ち着いてから言いたかったしね。」

佳代「文香もお母さんかあー。なんか変な感じ。」

文香「ついこの前まで高校生だった気がするんだけどね。」

佳代「何年前の話よ。でも、あつという間だったねえ。」

文香「私ももう立派なアラサー。」

佳代「ちよっと、考えないようにしてるんだから！」

文香「佳代はどうなの。」

佳代「え？」

文香「恋バナはないのかい？お？」

佳代「ないよ。」

文香「えー、つまんないのー。」

佳代「もう結婚しないでいいかも！将来は猫とひっそり暮らすよ。」

文香「えっ何悟りひらいてんの？」

佳代「それより文香、本当に体に気を付けるんだよ？何かあったらすぐ頼って、」

文香「もー！わかったってば。心配しすぎよ。ありがとう。」

佳代「そりゃ心配もするよ。」

文香「ねえ、今度集まらない？」

佳代「えっ」

文香「陽人くんと、落ち着いてるうちに皆で会ってきたいねって話しててさ。前田先生とか呼ぼうかな。佳代のとこのアルバイト君も来る？」

佳代「いいね。なんかプチ同窓会って感じ。」

文香「なら決まり！呼びたい人がいたら言ってね。」

佳代「うん、ありがとう。」

文香「じゃ、また日程決まったら連絡するから。」

佳代「待ってる。」

文香「今日は話せて良かった。邪魔してごめんね。」

佳代「全然いいよ。小さい店だし、ゆるーくやってるんでね。」

文香「また遊びに来る。」

佳代「うん、いつでも。」

文香、去る。

ため息をつく佳代。店の中に行き腰を下ろす。

佳代「子ども、か。」

おもむろに花をつみアレンジメントを始める。子どもが好きそうな、カラフルなものができていく。

俊孝が通り過ぎる。

そこへ、京子がやってくる。

京子「ごめんください。……佳代ちゃん？佳代ちゃん？」

手を止める佳代。

佳代「あつ、すみません！」

京子「あら良かった、とうとう私も幽霊になっちゃったと思ったわ。」

佳代「京子おばちゃん、笑えない冗談はよしてください。」

京子「この歳になったらそんな冗談も言いたくなるのよ。いつぼっくりいくか……」

佳代「あー、あー、もうやめましょう、私が悪かったです。」

京子「いつもの佳代ちゃんね。」

佳代「はい？」

京子「なんだか辛そうだったから。でも思い過ぎだったかしらね。」

佳代「ごめんなさい、気を遣わせちゃいました？」

京子「何言ってるの、私が勝手に心配したんじゃない。」

佳代「……」

京子「あ、そうだ。佳代ちゃん肉じゃが好きだったわよね。」

佳代「え！？あ、はい、好きです。」

京子「音楽聞きながら作ってたら作りすぎちゃったの。後で持ってこようねえ。」

佳代「えっ良いんですか？ていうか、どんな音楽聞けば作りすぎるんです。」

京子「シュガートーストとビタースナックみたいなの……」

佳代「シュガーソングとビターステップね。いや京子おばちゃんそんなの聞くんた。」

京子「弓弦君からレコード借りたのよおー。」

佳代「CDね。」

京子「(鼻歌)」

佳代「不死身だろうな、この人。」

そこへ、弓弦がやってくる。

弓弦「ちわーっす。」

佳代「ああ、もうまたなんか軽いの来た。」

弓弦「佳代さんちわーっす。あ、京子ちゃん来てくれてたんだ。」

佳代「ちよっと弓弦君、お客さんなんだから、」

京子「おお、弓弦君ちわーす。」

佳代「心は二十代？」

弓弦「貸したCD聞きました？」

京子「いやー、いい曲だったよお、ありがとうね。」

弓弦「良かった！(鼻歌)」

京子「(鼻歌)」

佳代「……………」

弓弦・京子、佳代をじっと見つめる。

佳代「いや歌いませんよ。」

弓弦「えー佳代っちつまんなーい。」

京子「佳代っちつまんなーい。」

佳代「佳代っちは忙しいんです！ほら京子おばちゃん、今日もこれで良い？」

佳代、お墓参り用の花束を持ってくる。

京子「あら、いつもありがとうねえ。」

弓弦「さすが佳代さん仕事が早い！」

佳代「あなたは早く準備をして！」

弓弦「はい。」

弓弦、店の奥に行く。

京子「ふふ、なんだか楽しかったわ。ありがとう。」

佳代「私はどっと疲れました。」

京子「じゃあね、後で肉じゃが持つてくるから。お昼にでも食べなさいよ。」

佳代「はい、ありがとうございます。」

弓弦「(奥から)肉じゃがくれるんすか?おばちゃん俺も!」

佳代「面の皮!」

京子「はいはい。もちろん持つてきますよ。」

佳代「お気をつけて。」

京子、去る。エプロンを付けた弓弦が奥から出てくる。

佳代「もう弓弦君、悪ノリしないでよね。」

弓弦「はいっす!」

佳代「いや褒めてないんだけど。」

弓弦「あれ、なんかかわいいアレンジメント。」

佳代「ああ、それ。」

弓弦「注文すか?」

佳代「いや、ちょっと、練習をね。」

弓弦「佳代さんもう練習いららないでしょ。」

佳代「いくつになっても勉強よ。ほら、もういいでしょ。」

弓弦「俺欲しいなあ、これ。」

佳代「五万円。」

弓弦「もう一声!」

佳代「二十万円。」

弓弦「まだいける!」

佳代「ひゃ、百億万円!」

弓弦「のった!」

佳代「頭大丈夫?」

弓弦「そこまででもして欲しいってことだよ、佳代さんって鈍いよなあ。」

佳代「デイスられてる?」

弓弦「ね、だめ?」

佳代「だからなんでそんなに、」

弓弦「ああもう救いようがないっすね!ほんとに!」

佳代「やっぱりデイスられてる?」

弓弦「ま、渡したくないなら別にいいっすけど。」

佳代「はあ。そんなに言うならあげる。」

弓弦「え、ほんと!?!」

佳代「うん。練習用だったけど、可愛がってあげて。」

弓弦「ありがとうございます！」

弓弦、佳代に抱きつこうとする。気づかず偶然にもかわす佳代。

佳代「あ、ここ置いとくから帰るとき持ってたって、……なにやってんの。」

弓弦「自分の愚かさを反省してるっす。」

佳代「今更。」

弓弦「え！」

佳代「あ、そうだ。弓弦くん今度パーティーに来ない？」

弓弦「ほえ？」

佳代「文香がさあ、あ、文香って時々来る友達ね。」

弓弦「ああ、佳代さんのご親友。ズツ友。会ったらつい喋りすぎちゃうんすよねえ、あの人。」

佳代「たぶん文香だけじゃないと思うけど。」

弓弦「で、文香さんがどうしたんすか？」

佳代「子どもができたんだって。」

弓弦「え！めっちゃおめでたいじゃないですか。」

佳代「うん。それでね、生まれる前にみんなで集まるとききたいねーって。ほら、子育て始まったらしいらいろいろ大変だしさ。」

弓弦「なるほど。え、それに俺も、？」

佳代「うん。来ない？」

弓弦「いや俺どこポジションなんすか。」

佳代「だって文香がアルバイト君も来る？って言ってくれたんだもん。」

弓弦「嬉しいっすけど俺超アウェイ。」

佳代「来てよ弓弦君。」

弓弦「佳代さん？」

佳代「お願い。」

弓弦「なんで、」

佳代「平常心でいたいなのよ。弓弦君いたら、いつもの私でいられると思うの。」

弓弦「佳代さん。」

佳代「ごめん、やっぱり今のなし。ごめんね。ちょっと水換えてくる。」

弓弦「あ、ちょっと。」

佳代、ハケる。

弓弦「……。」

俊孝が通り過ぎる。

陽人の会社。

陽人「じゃ、美和ちゃんこれチェックしといたから、よろしくね。(と言って書類を渡す)」  
美和「はい。」

陽人「今日はもう帰って大丈夫だと思うから。」

美和「はい。……石田先輩も可愛い奥さんのために早く帰らなきゃですよ！」

陽人「こら。あんまりからかうなよ。」

美和「ふふ。」

陽人「あ、そうだ。そういうえば嫁が美和ちゃんに会いたいわって言ってたよ。」

美和「え！？奥様が？な、何ですか。私何かしました？」

陽人「いやいやそうじゃなくて、俺もこうやって仕事でお世話になってるし、顔合わせておきたいわってさ。」

美和「お世話になってるのは私の方じゃ。」

陽人「あはは、確かに。ドジの後始末は俺がやってるし、」

美和「ちよっと先輩！」

陽人「冗談だよ。とにかくそんなネガティブな理由じゃないから。」

美和「そうですかあ？乙女心はわかりませんよ。」

陽人「え？」

美和「私に会って、旦那に手を出すなよおらあ！この泥棒ネコ！おらあ！……みたいな圧を出されるかもしれないじゃないですか。」

陽人「俺の嫁のことどう思ってるの？大丈夫だって。てか美和ちゃん新婚さんでしょ。」

美和「その理屈が通ったらダブル不倫だなんて言葉は生まれませんよ。」

陽人「はいはい。とりあえず今度会ってくれよ。」

美和「考えときまーす。」

石田宅。

陽人「ただいま。」

文香「あ、おかえり！今日は早かったんだね。」

陽人「いやー、まあ、ね。」

文香「今朝佳代に会ってきたんだ。」

陽人「……佳代ちゃんに？」

文香「うん。直接会って報告したくてさ。」

陽人「そっか。佳代ちゃん元気だった？」

文香「あー、どうだろ。元気そうにはしてたけど。」

陽人「やっぱりまだ気にしてるのかな。」

文香「どうだろう。」

陽人「俺がはつきりしなかったからだよな、ごめん。」

文香「まあでも、これは私と佳代の問題だし、」

陽人「今度、来てくれるって？」

文香「うん。一応誘えた。」

陽人「良かった。じゃあ、その時俺からいろいろ話してみるよ。」

文香「陽人くん。……大丈夫？」

陽人「って、思い過ぎしだったら恥ずかしいけどな。」

文香「その方が良くんだろうけどね。」

インターホンが鳴る

陽人「こんな時間に？」

文香「誰だろ、ちょっと出てくるね。」

陽人「ああ。」

文香、玄関に行く。

文香「はい。」

俊孝「……あ。」

文香「え？す、すみません、どなたですか？」

俊孝「えっと、」

文香「あの、間違えてませんか？それでしたらお引き取りください」

俊孝「ふみちゃん。」

文香「は？」

俊孝「ふみちゃん、僕です。俊孝です。」

文香「俊…孝さん？」

俊孝「はい。」

文香「すみません、存じ上げないんですが、どこかでお会いしました？」

俊孝「高校の時同じクラスだった梶山俊孝です。」

文香「あの。そんな人いませんでしたけど。からかいなら他をあたってくださいませんか。」

俊孝「やっぱり覚えてないんだ。」

文香「だから、覚えてないものにも、あなたのこと知りませんってば。」

俊孝「ふみちゃん。」

文香「その呼び方も何なんですか。」

陽人が出てくる。

陽人「文香？大きな声を出してどうしたんだ？」

俊孝「あんた：」

文香「陽人くん、良かった、全然知らない人が：」

陽人「どちら様でしょう。こいつも怖がっているので、お引き取り願えませんか。  
でなければ警察を、」

俊孝「人の気も知らないで。ふみちゃん、そいつ浮気してるんだ。」

陽人「は？」

文香「陽人くんが？」

陽人「おい、お前本当になんなんだ。俺たちの何を知ってるんだよ。」

文香「陽人くん：？」

俊孝「静かににらみつける」

陽人「黙ってないで答えろ！」

文香「……」

俊孝「あんたのせいで佳代ちゃんが……。」

俊孝、走り去る。

陽人「おい！」

文香「陽人くん、落ち着いて。」

陽人「落ち着けるかよ。いきなり来ていきなり意味の分からない容疑をかけられたんだぞ。」

大体あいつは何なんだ？お前の事ふみちゃんって。」

文香「わからない。」

陽人「しばらく来客には気を付けよう。ごめんな、怖い目に合わせて。今度から俺が出るよ。」

文香「うん……」

陽人「信じてるのか。」

文香「え？」

陽人「あいつが言ったこと。信じてるのかって聞いている。」

文香「そ、そんなことない。陽人くんがそんなことするなんて。」

陽人「そう。ならよかった。」

文香「見ず知らずの人だよ？ただの愉快犯だよねえ。」

陽人「佳代ちゃんって言ってたな。」

文香「うん？」

陽人「最後。」

文香「そういえば…。」

陽人「お前の名前も知ってた。」

文香「でも私たちは知らない。」

陽人「…ごめん、今日は少し休ませてくれ。」

文香「う、うん。」

陽人、奥に去る。

電話で話している佳代。近くで花の世話をしている弓弦。

佳代「うん、うん。何なのその人！信じられない。」

佳代の圧にびっくりする弓弦。

佳代「戸締りちゃんとしなよ？」

佳代のやさしさにホッとする弓弦。

佳代「私のことを？知らないよ、そんな人！気持ち悪いなあ。」

佳代の圧を怖がる弓弦。

佳代「とにかく、そんな変な人無視して身体大切にしなくちゃ。一応警察にも報告して…え？」

お店のドアのベルが鳴る。

小包を持ち郵便局員の格好をした俊孝がいる。

俊孝「こんにちはー。」

佳代「それは仕方ないと思うけど……。」

弓弦「あ、お兄さん！あざっす。」

俊孝「水戸佳代様あてのお荷物が届いているのですが。」

弓弦「ああ、今電話中つすわ。俺が預かっててもいいっすか？」

俊孝「え、…ええ。絶対に本人様にお渡しくださいね。」

弓弦「大丈夫、大丈夫。」

俊孝「ここに、受け取りのサインをお願いします。」

弓弦「ういうい。確かに受け取りましたよーっと。」

俊孝「…ご本人によりしくお願いします。」

俊孝、お店を出る。意味ありげに一度振り向き、去る。

店の奥に戻ってくる弓弦。小包を大切そうに置く。

佳代「…そう。大丈夫だと思うよ？陽人先輩はそんなことしないって。うん。また連絡して。

大丈夫。じゃあね。」

佳代、電話を切る。

弓弦「あ、佳代さん、もういい？」

佳代「ああ、ごめんね。ちょっと長話しちゃった。」

弓弦「全然。ああ、これさっき届きましたよん。」

佳代「誰から？…何だろう。」

手に取り差出人の欄を見る佳代。その手を一瞬止める。

佳代「あれ、文香からだ。」

弓弦「さっき電話してたんじゃないすか。」

佳代「うん、特に何も言ってなかったけど。」

弓弦「もしかして、サプライズ！だったりして？」

佳代「何のサプライズよ。」

小包を開ける佳代。中から一輪のドライフラワーが出てくる。

佳代「ドライフラワー。」

弓弦「佳代さんに花を贈ってくるなんて粋っすねえ。」

佳代「いやうちに余るほどあるんだけど。」

弓弦「だからこそじゃないっすか！」

佳代「は、はあ。なんか急に熱くない？」

弓弦「あ、いや、あはは。」

佳代「それにしても綺麗だな。人からもらうってのも悪くないね。」

弓弦「でも以外っす。文香さんってめっちゃ豪華な花束くれそうなのに。」

佳代「まあ、文香にしては地味だねえ。」

弓弦「連絡したらどうですか。」

佳代「え？」

弓弦「さっきから嬉しそうっすよ。そのまま、伝えたらどうです。」

佳代「ああ、うん、そうだね。なんで送ってきたのか気になるし。後でメールしとこ。」

弓弦「直接じゃなくていいのん？」

佳代「さっき話したし。ほら、今度会うし？だから大丈夫。あんまり邪魔しすぎるのも、さ。」

弓弦「そっか。」

佳代、店の奥に花を置く。

弓弦「……佳代さん。」

佳代「なあに？」

弓弦「今度のパーティのことだけど、」

突如、何かが割れる大きな音。

美和「ぎゃー！」

美和が手を振り払いながら転がりこんでくる。

佳代「ひっ」

弓弦「わー！」

美和、佳代と弓弦に突進、その後二人としばらく顔を見合わせ、再び驚く。

美和「うわぎゃあーっ！ナメクジイ……。」

その場に倒れる美和。

佳代「えっ、嘘でしょ。」

弓弦「えっ、俺ナメクジ？」

死にかけの虫を囲むように怯える二人。

美和「はっ！」

急に気を取り戻し勢いよく起き上がる美和。

佳代「ひい！」

弓弦「あ、えっと」

佳代「い、いらっしやいませ？」

弓弦「い、いらっしやいませ？」

美和、落ち着いて息を整える。

美和「あっ！急にすみません！」

佳代「あ、いえ、少しびっくりしただけです。」

弓弦「少しね。お姉さんどしたのん？」

佳代「ちよっと！なれなれしすぎるって。」

美和「あのお。」

佳代「はい！」

美和「ごめんなさい。」

佳代「え？」

美和「お店の前の植木鉢、割っちゃったみたいで。」

弓弦「あの勿忘草の？」

佳代「お怪我はありませんか？」

美和「えっ」

佳代「割っちゃったんですよ。どこか切っていたら大変だから……。」

弓弦「佳代さん。」

美和「そんな、割っちゃったのにすみません！私は大丈夫ですので！この通り！」

佳代「それならよかったです。」

弓弦「てか、すごい慌ててたけど。」

美和「(弓弦の方を見て) ナメクジです。」

佳代「え？」

弓弦「(小声で) やっぱり俺がナメクジ……？」

美和「わすれた草でしたっけ。」

佳代「勿忘草です。」

弓弦「あ、忘れちゃだめだよん。」

美和「そ、その勿忘草がかわいくてついつい近くで見たら……。」

佳代「ナメクジが？」

美和「(大げさに頷く)」

弓弦「女の子は苦手だよねえ。」

佳代「私は大丈夫だけど。」

弓弦「それは、まあ、」

佳代「え？」

美和「ええと、こういう時ってどうしたらいいんですっけ！あ！弁償。弁償だ！いくらです

か？いくらですか？百億円までなら頑張ります！この通り！」

佳代「あちゃー。」

弓弦「なんか、デジャブってる？」

佳代「あの、お客様。」

美和「は、はい。」

佳代「ちょっと待っていてください。弓弦君、面白い話でもしてて。」  
弓弦「えっ、ちょっと!？」

佳代、店先の花を回収した後の奥に消える。

弓弦「面白い話、面白い話…」

美和「彼女さんですか？」

弓弦「え、うん?…え!？」

美和「いや、ちょっと気になって。」

弓弦「いやぐいぐいくるっすね!」

美和「あなたに言われたくないですけどお。」

弓弦「ええ。」

美和「で、どうなんですか?どうなんですか?やっぱりそういうご関係なんです?それとも昔告白したけど振られちゃったとか。いやそれともお互いに愛し合っているけどはばかり壁が、」

弓弦「ちょ、ちょっとお姉さん?おーい。」

佳代が戻ってくる。

佳代「珍しい、弓弦君が引いてる。」

弓弦「うわ、ちょっと。」

美和「きゃー。」

佳代「え、何よ。」

美和「いえ!なんでも!」

佳代「はい、これ。」

佳代、店先の勿忘草やカスミソウで彩られた即席の花束を渡す。

美和「え?」

佳代「店先の花、気に入ってくれたみたいだったから。ちょっとアレンジ加えて。出来合いだからちょっと不格好だけど。」

美和「うわあ、すごく綺麗。えっ、これ私に?」

佳代「ええ。弁償はいいから、これ私の押し付けだと思って持って帰ってくださいますか。」

美和「そ、そんな!割った上にただでいただくなんて。」

佳代「私からのお願いですよ。それ気に入ったらまた来てくれたらいいから。」

美和「うわあ、やさしい。」

弓弦「でしょ？」

美和「なんであなたが。……なるほど。」

佳代「え？」

美和「いえ！本当にありがとうございます。ぜったいまた来ますね！」

佳代「お待ちしております。気を付けて。」

弓弦「あ、ありがとうございますー。」

美和、去る。

佳代「さ、弓弦君、お店の前掃除しよっか。弓弦君？」

弓弦「ほえ？え、あ、はいっす！」

佳代「なんかぼーっとしてない？」

弓弦「あ、いえ。佳代さん、良かったんすか？」

佳代「何が？」

弓弦「お代っすよ。」

佳代「ああ、全然。」

弓弦「でも、」

佳代「お父さんが昔よく言ってたの。」

弓弦「何て？」

佳代「お花は人を笑顔にするもんだって。お金も大事なんだけどさあ、暗い気持ちでお店を去ってほしくなくて。ま、いいの。あのまま弁償させて返してたらお父さん空から怒鳴ってたよ。」

弓弦「そっか。佳代さんはちゃんと守ってるんすね。」

佳代「ん？」

弓弦「このお店。」

佳代「まあね。さ、掃除掃除！」

弓弦「はーい！」

店先に出て掃除を始める二人。店の奥にはドライフラワーが不気味に存在している。

ドライフラワーにスポットが当たりつつ周りがだんだん暗くなる。

意味ありげにドライフラワーを照らした後、ゆっくり暗転。

舞台中央に俊孝。

俊孝「文香、佳代、俊孝。」

ひも（植物のつたのよう）を垂らしている。

俊孝「3人仲良く過ごしていました。」

何もついていないひもをただただ操る。

俊孝「なにかも僕の思い通り。」

だんだん激しくひもを操る。

俊孝「だけど僕はいなくなつた。」

ひもを制御できず自分に巻き付ける。

俊孝「現実が理想か、理想が現実か。」

だんだん身動きが取れなくなる。

俊孝「記憶にないのは死んでも同じ。」

苦しそうにもがく俊孝。

俊孝「あなたを幸せにしたいだけ。」

激しくもがく俊孝。

俊孝「幸せに……」

だんだん力がなくなる俊孝。ひもが巻き付いたまま、弱々しく去る。うつろな目で何かを追い求め舞台端に移動。反対側に佳代。ドライフラワーを嗅ぐ。

花屋。(勿忘草が綺麗なままに戻っている) 店先で談笑する佳代と文香。

佳代「いつ?どこで?会社の人?年下?」

文香「ちょ、ちょっと佳代、落ち着こっか?」

佳代「だってびっくりしちゃったんだもん。なんか信じられなくて。」

文香「もう。私よりうろたえてる。」

佳代「そりゃそうでしょ!だってあの陽人先輩が。」

文香「うん。私もあんまり信じてないよ?でも女の人と二人で歩いてたって聞いたら、  
ねえ。」

佳代「ただのお仕事だったんじゃないかな。ほら、いつも話してる後輩ちゃんとか。」

文香「その可能性の方が高いね。ま、私は自分の目で見ただけしか信じないから。」

佳代「そう。」

文香「でも柄にもなくちょっと不安になっちゃった。」

佳代「そりゃ、あんなことがあったら……」

文香「あんなこと?」

佳代「え?ほら、いつぞやの不審な男の話!」

文香「なに、それ。」

佳代「もう、この前電話してきたじゃない。」

文香「佳代、何か勘違いしてない?」

佳代「え?」

文香「ま、いいか。とにかく、少し不安だったから佳代のとこに来ちゃった。いつもごめんね。」

佳代「え、ああ、うん。」

文香「万が一のことがあったら……」

佳代「そ、そんなことないでしょ、陽人先輩に限って。」

文香「きっぱり、別れます。」

佳代「文香?」

文香「もしもの話!それじゃあね。話聞いてくれてありがとう。」

佳代「ちょっと、文香。」

文香「午前休しかとってないから、そろそろ行かなきゃ。」

佳代「ちょっと待って、お仕事辞めたはずじゃ……」

文香「じゃあね。また連絡する。」

佳代「文香!」

文香が去る。

花屋。勿忘草の植木鉢がなくなっている。

ドライフラワーを持って机に突っ伏している佳代。

弓弦がやってくる。

弓弦「佳代さん。佳代さん！かーよーさん！……佳代っち？」

佳代「文香……。」

弓弦「佳代っち！起きてください。そうしないと……。」

佳代にちよっかいをかけようとする弓弦。

途中で目が覚める佳代。ドライフラワーが手から離れる。

佳代「……弓弦君？」

異常な姿勢で固まる弓弦。

佳代「何やってるの？」

弓弦「じ……自分の愚かさを反省してるっす。」

佳代「今更……じゃなくて、文香は？」

弓弦「文香さん？なんで？」

佳代「さっきまで文香と話してて、あれ？」

弓弦「佳代さん、夢でも見てた？」

佳代「夢？」

弓弦「文香さんにもらった花、持ったままぐっすりでしたよん！注文の品作るからって奥に行つて、それつきり戻ってこないから心配で来ちゃった。」

佳代「そうだったけ？ああ、仕事中にごめん。」

弓弦「いいってことよん。佳代さん、お疲れみたいだから。今日は俺に任せて、休んでたら？」

佳代「あ、いや、大丈夫！全然元気だし。ちよっと、変な夢は見たけど。」

弓弦「変な？」

佳代「ちよっとね。……。」

弓弦「佳代さん？」

佳代「夢ってさ。」

弓弦「うん。」

佳代「よく、願望が現れるとか言うじゃない。」

弓弦「あー、確かに！それなら俺も佳代さんと夢の中で……」

佳代「やっぱりそうなのかな。」

弓弦「うーん、届かぬ想い。」

佳代「ねえ、聞いている？」

弓弦「すっごくブルーメランっすよ、それ。」

佳代「弓弦君。」

弓弦「あー、いやまあ、夢って不思議なもんっすけど。そこまで深い意味もない気もしますよ。あんまり気にしすぎるのも体に毒ですって！ほら、紅茶でも入れてきましょ  
うか？」

佳代「あ、うん、急にごめんね。気にしすぎ、か。」

弓弦「うんうん！きつとそうっすよ。ちょい待っててねん。」

弓弦、ハケる。

佳代「ただの夢よね。」

佳代、作りかけの花束を作っていく。

横に、ドライフラワーが不気味に存在している。

俊孝がゆっくりと通り過ぎる。

店内でラジオを聴く佳代と京子。

アナウンサー「続いてのニュースです。先日ダブル不倫で話題となっていた俳優の……」  
(俊孝に読ませても面白いと思いますが彼に読ませると抽象感が増します)

ラジオを露骨に切る佳代。

佳代「くだらない。」

京子「佳代ちゃんは昔から嫌いよねえ、こういうの。」

佳代「だって時間の無駄じゃないですか。他人の人生気にしてる暇があったら、今ここに咲いてる花と向き合った方が良いでしょうよ。」

京子「そうねえ。」

佳代「大体、当事者だけで解決したらいいのに、部外者がショーでも観るみたいにワクワクして、みっともない。」

京子「佳代ちゃん。」

佳代「はい?」

京子「やっぱり、何かあった?」

佳代「あ……いえ。すみません。」

京子「悪い癖ね。友幸さんによく似てる。」

佳代「お父さんと?どこが?」

京子「なんでも隠しちゃって、猫みたいなところ。」

佳代「猫って。」

京子「でも、こーんなに小さい時から佳代ちゃんを見てきたの。私にはわかっちゃうわ。」

佳代「京子おばちゃん……。私、本当に大丈夫ですから、気にしないで。」

京子「ほら。」

佳代「……本当に、バカみたいな話ですよ。」

京子「いいのよ。」

佳代「親友に、子どもができたって。」

京子「あら、おめでたいじゃない。」

佳代「普通、そう思うでしょ。でもね、私最低なの。」

弓弦がやってくる。雰囲気を感じて聞き耳を立てる。

佳代「とっても嬉しいのよ?でも、素直に喜べない自分もいるの。」

京子「そう。」

佳代「それだけ？最低だなんて、なりません？新しい命ですよ！すっごく、おめでたいことなんですよ！」

京子「どんな理由があるかはわからないけど、佳代ちゃんはちゃんと喜ぶ気持ちも持つてるのよね。」

佳代「まあ、はい。」

京子「いい、佳代ちゃん。人は百パーセント善意を持ったまま生き続けるのは難しいのよ。」

佳代「どういうこと？」

京子「いつでも優しい自分で。誰かにとって最高の自分で。みんなの理想の自分で。そうやって生き続けるのは苦しいわ。」

佳代「それ、私はいいいことだと思います。」

京子「うん？」

佳代「私は、人のために生きたいから。」

京子「佳代ちゃん。」

佳代「わがままなだけなんです。人に向けた暗い感情も、結局自分の理想を押し付けてるだけなの。だから最低なの。」

京子「そうかしら。」

佳代「そうですね！もう何年引きずってるのって感じ。文香の事が大好きなのに、心からそう思えない時もあるの。全部全部私の都合なのよ。こうだったらいいのに、って空想だけ。子どものまま、前に進めてないんだから……。」

京子「苦しいねえ。苦しい。」

佳代「京子おばちゃん。」

京子「もっと、そばで撫でてあげたらよかった。お父さんがいなくなってから、ずっと頑張って来たんだもんね。」

佳代「……うん。」

京子「良いのよ。もっと、わがままになりなさい。」

佳代「でも……。」

京子「それを受け止めてくれる人が、佳代ちゃんの周りにはいっぱいいるからね。」

佳代「そうかな。」

京子「自分のために、生きるの。」

佳代「うん……。」

立ち去ろうとする弓弦。

俊孝と出会う。

俊孝「夢じゃないです。」

弓弦「え？」

俊孝「夢じゃないです、とお伝えください。」  
弓弦「え、ちょっと、」

俊孝が去る。

石田宅前。二人で歩く佳代と弓弦。

佳代「ごめんね、弓弦くん。結局来てもらって。」

弓弦「いいってことよん！どんなご飯ありますかね！俺カリフォルニアロールが食べたい  
っす！」

佳代「……何、それ。」

弓弦「えっ。」

佳代「えっ。」

俊孝とすれ違う。

弓弦「あれ。」

佳代「ん？どうしたの？」

弓弦「あの人、」

前田が出てくる。

前田「佳代さん？」

佳代「前田先生！？」

前田「いやあ、長らく会ってなかったからねえ、わからなかったよ。」

佳代「私は一発でわかりましたよ！先生ずっと変わらないんだから。」

弓弦「あ、どうも。」

前田「君は……」

佳代「私のところお手伝いしてくれてるアルバイト君です。」

弓弦「佐倉弓弦と申します。三葉芸術大学の院生です。」

佳代「猫かぶってます。」

弓弦「ちよつと佳代っち！」

前田「ははは、そうかい。これは元気な子に手伝ってもらえて、良かったねえ。」

佳代「まあ、おかげさまで。」

前田「お父さんも、喜んでるだろう。」

佳代「だといいんですけど。」

玄関のドアが開く。文香が出てくる。

文香「ちょっと、立ち話するくらいならピンポン押したらいいのに。」

佳代「ああ、ごめん、うるさかった？」

前田「おお、文香さん。この度は本当におめでとう。」

弓弦「文香さん、ちーっす！」

文香「ちょっと！一気に話さないで。挙手！」

弓弦「はいはいはいはい！」

佳代「はいっ！」

前田「はーいっ！」

文香「だめだこりゃ。」

陽人が出てくる。

陽人「みなさんお揃いで。細かい挨拶はおいといて、とりあえず中へどうぞ。  
佳代「……。」

一同、喋りながら中へ入る。黙っている佳代。

広い居間、思い思いに座る。

奥で陽人と前田が話している。

文香「佳代、今日はありがとね。」

佳代「こっちこそ呼んでくれてどうも。」

文香「アルバイト君も。」

弓弦「文香さんが呼んでくれてたっというから！」

文香「相変わらずなれなれしいわねえ。」

佳代「あはは。」

陽人と前田がやってくる。

陽人「あとちょっとしたらもう一人くるんで。」

弓弦「あ、カリフォルニアロール。これですよ佳代さん、これがカリフォルニアロール。」

文香「え、何佳代知らなかったの？」

佳代「え？あ、うん。いや知らないでしょ！そんなおしゃれな食べ物！」

文香「おしゃれ？」

前田「ははは、これは高校の時教えておくべきだったかな？」

佳代「え、そんなに常識なんです？ありえない。」

陽人「俺もちょっと前までは知らなかったよ。なかなか知る機会ないよね。」

佳代「……ええ、そうですね。」

陽人「……。」

文香「もう一人、山下さんだよね。」

陽人「あ、ああ。俺の職場の後輩を呼んだんです。こいつがどうしても会いたっていうから。」

前田「お仕事の方も頑張ってるみたいだね。陽人君の年齢だと、いろいろ大変そうだ。」

陽人「はは、後輩に頼られ先輩に叱られ……でも、楽しいですよ。」

前田「そうかい、いい顔してるもんな。」

弓弦「俺も佳代さんに頼られ佳代さんに叱られ……でも楽し」

佳代「ちよっと。」

弓弦「ほら！」

文香「佳代、あんまりいじめないのよ？」

佳代「え、今の私が悪い？」

陽人「二人は仲いいんだね。」

弓弦「でしょー。」

佳代「……。」

文香「佳代。」

インターホンが鳴る。

陽人「お、来たかな。」

陽人、玄関先に出る。

前田「しかし、二人とも本当に立派になって。」

文香「そうでしょう！」

佳代「いえ、私はそんな。」

前田「立派ですよ。もう少し胸を張っていなさいな。」

佳代「それ、ずっと言われてたなあ。」

文香「昔からそこそこ変わらないよね佳代は。」

前田「大丈夫ですよ。」

佳代「え？」

前田「あなたを見てくれている人は、案外たくさんいるもんです。」

佳代「……。」

陽人と美和がやってくる。

美和「お邪魔します！」

陽人「職場の後輩の山下美和です。」

美和「どうも。なんだか場違いですみません！」

弓弦「あー！」

佳代「あ。」

美和「え？」

文香「ちょっと、急にどうしたのよ。」

佳代「いや、あの、この間ナメクジが。」

弓弦「百億万円です。」

文香「わけわからん。」

前田「お知り合いかな？」

美和「ええと……うーんと……すみません私人の顔覚えるの苦手です。」

佳代「あ、いやこの前お店に来てくれましたよね。」

美和「お店？」

陽人「ああ、佳代ちゃんの店に行ったのか。花なんて興味あるんだな。」

美和「失礼な！私だってお花くらい、ってあの時の店員さん？」

弓弦「そうっす！」

美和「ああ、このチャラ男店員は思い出しました。」

弓弦「ちょっと」

美和「その優しい店員さんのことも！忘れた草くれたっけ。」

陽人「忘れた草？」

佳代「勿忘草ね。」

弓弦「だから忘れちゃだめだよん！」

前田「勿忘草とは、佳代さんらしい。」

佳代「私らしい？」

前田「いえいえ、こちらの話ですよ。」

陽人「案外世間って狭いもんだな。」

文香「ちょっとは話しやすくなったんじゃないですか？山下さん。」

美和「え？あ、はい！」

陽人「意味わからないのに返事するなよ。」

美和「えへへ。」

文香「……。」

陽人「……とりあえず、人もそろったし乾杯でもしますか！ほらほら、みんなグラスを持つて。」

思い思いに宴会を楽しみ始める一同。

佳代「あ！」

文香「今度は何よ。」

佳代「お花で思い出した。」

弓弦「いつも囲まれてるっすけどね。」

佳代「文香、この間はありがとう。メールしようと思ったんだけどすっかり」

文香「え？私何かしたっけ？」

佳代「もう、とぼけないでよ。綺麗なドライフラワー、送ってくれたじゃない。」

文香「は？」

佳代「え？」

弓弦「めっちゃ綺麗だったよんねん！お店の奥に飾ってあんの。」

文香「いや……そんなの送った覚えないんだけど。」

佳代「ちょっと、嘘でしょ？からかってる？」

文香「そっちこそ。とにかく、私はそんなの送ってないって。ていうか、佳代にお花贈るかねえ。」

佳代「だって弓弦君はだからこそ贈るもんだ！粹だねえ！って。」

弓弦「ちょ、佳代さん。」

文香「ほーん。」

弓弦「文香さんも！」

佳代「でも、おかしいよ。」

文香「うん？」

佳代「本当に文香の住所から文香の名前で送られてきてたのよ？ほんとうに違う？」

文香「何それ、気持ち悪い……。でも本当に違うよ。」

佳代「じゃあ、どうして？」

弓弦「旦那さんとかっすかね？」

文香「陽人君が？どうして私の名前で。あ、ちょっと待ってて。」

文香、美和たちと話す陽人に耳打ちをして隅に連れていく。  
何やら話した後、戻ってくる。

文香「陽人君でもないってよ。」

佳代「ええ。」

弓弦「んじゃ、本当にわからないっすねえ。」

佳代「やっぱり嘘ついてる？」

文香「だから、嘘じゃないって何回聞くのよ。頑固なところも相変わらずね。」

佳代「ごめんってば。でも気になるじゃない。」

弓弦「あー、いたずらかもよ！」

文香「私の個人情報を使って？悪質すぎるでしょ。」

佳代「文香、ごめん。帰ったらもっかい確認してみるね。」

陽人達が弓弦を呼ぶ。そちらへ飛んでいく弓弦。

文香「うん。あー、最近怖いことばっか。呪われてんのかな。」

佳代「変な男のこと？」

文香「そうそう。」

佳代「あれから来てない？」

文香「来てたら真っ先に佳代に言ってるよ。」

佳代「そっか。」

文香「……ありがとね。」

佳代「え？」

文香「私がおかあったとき、真っ先に相談するのが佳代だった。」

佳代「き、急に何よ。」

文香「相談、聞きたくない時もあったよね。特に、」

陽人が近づいてくる。

陽人「佳代ちゃん。」

佳代「え、あ、陽人先輩。今回は本当におめでとうござい」

陽人「ちよっといいかな。」

佳代「はい？」

文香に目配せする陽人。文香、弓弦たちのもとへ行く。

陽人「庭の方で話せない？」（移動するまでサイレントでも可）

佳代「……。」

少し移動する二人。

陽人「……。」

佳代「……。」

陽人「あのさ。」

佳代「はい。」

陽人「ごめん、俺遠回しに言うの苦手だから単刀直入に聞くね。」

佳代「え、あ、はい。」

陽人「……俺の事、好き？」

佳代「え？」

陽人「あ、いや、ちょっと違うな。俺の事、まだ好き？」

佳代「え、ちょっと、あの。」

陽人「違ったらいいんだ！変なこと聞いてごめん。」

佳代「気づいてたんですか。」

陽人「うん、まあ。というか文香に言われて……」

佳代「文香に。」

陽人「うん。本当は結婚式の前にちゃんと話そうって思ってたんだけど。二人ともなかなか勇気が出なくて。」

佳代「文香も気づいてたんだ、ずっと。」

陽人「佳代ちゃん？」

佳代「そうですね。もう何年一緒にいるんだって感じですよんね。気づいてなきやおかし  
いか。」

陽人「あ、でも文香はなんていうか、佳代ちゃんを気にして、」

佳代「まだ好きかと聞かれれば、とっくに諦めはついているんだと思います。」

陽人「えっ。」

佳代「ああ、いえ、本人の前で言うことでもないかもですけど。」

陽人「いや、いいよ。」

佳代「私がうじうじしてるだけなんですよ。それで二人にこんなに迷惑かけて。すみません。」

陽人「迷惑だなんて、そんな。」

佳代「迷惑ですよ。二人の間に私が入って、邪魔して。いい歳した大人が踏みとどまって。

挙句、気を遣わせて。穴があったら入りたいどころじゃないです。」

陽人「……。」

佳代「ごめんなさい。」

陽人「どうして佳代ちゃんが謝るのさ。」

佳代「やっぱり、私のわがままで二人の時間を奪うなんてできません。すべて忘れてくださ  
い。」

陽人「え？」

佳代「お願いします。私はもう大丈夫だって、文香にも言ってください。それで、全部、な  
かったことにしてください。お願いします。どうか忘れて。」

陽人「そんなこと、」

佳代「ごめんなさい。……ごめんなさい。」

走り去る佳代。

陽人「佳代ちゃん！」

文香が現れる。

文香「あれ、佳代は？」

陽人「文香。」

文香「……私、追いかけてくる。」

陽人「こら、走ったらダメだろ！」

文香「でもあなたが行っても、」

弓弦がやってくる。

弓弦「あ、ここにいたんすね！前田っち先生が呼んでるっすよ！」

文香「あ……。」

陽人「……。」

弓弦「俺、外の空気吸って来るっす。」

文香「弓弦君。」

弓弦、去る。

外。俊孝が立っている。  
そこへ佳代がやってくる。

俊孝「お待ちしておりました。」

佳代「え？」

俊孝「水戸佳代さん。お久しぶりです。」

佳代「あの、どちら様ですか？」

俊孝「やはり、あなたも覚えてらっしゃいませんか。」

佳代「あなたも？」

俊孝「苦しくないですか。」

佳代「え？」

俊孝「不思議な夢を見たあなたが思った日、少し期待したんじゃないやありませんか。」

佳代「急に何なんです？何が言いたいんですか？大体あなたは誰なんですか？」

俊孝「質問は一つにしてください。」

佳代「おちよくってるんですか。」

俊孝「きっぱり別れます。」

佳代「はい？」

俊孝「文香さんがそういった時、願わくはその方が一のが起きて欲しいと……。」

佳代「そんなことはありません！というか、どうして夢の内容を、」

俊孝「当たっていましたか。同じものを見ていたんですね、僕たち。」

佳代「どういうこと？」

俊孝「いえ、こちらの話ですよ。一つ言えるのは、あなたが見たものは夢ではない、ということですよ。」

佳代「そんなはずはありません。文香は今仕事を辞めてますし大体不審な男の事も通じなくて……もしかしてあなたですか？」

俊孝「さあ、どうでしょう。」

佳代「さあって。」

俊孝「あのドライフラワー、素敵ですよね。」

佳代「ちょっと、話にまとまりが、」

俊孝「ありますよ。ありますとも。」

佳代「は？」

俊孝「あなたは何をお望みですか。誰も苦しめない方法が、あるんですよ。」

佳代「さっぱり意味が分からない。」

弓弦がやってくる。

俊孝「おっと。では僕はこれで。」

佳代「あ、ちょっと!」

俊孝「……悲しい時このドライフラワーの香りを嗅いでごらん下さい。」

俊孝、佳代に再びドライフラワーを渡す。

佳代「え? どうしてこれを?」

俊孝が去る。

弓弦とすれ違う。

俊孝「献身的ですね。」

弓弦「あ、あの時の。」

俊孝「あなたの立場でありたかった。」

弓弦「え?」

俊孝、去る

佳代「弓弦君?」

弓弦「佳代さん。」

佳代「……。」

弓弦「あー、ちょっと外の空気吸いたくてねん。」

佳代「ありがとう。」

弓弦「え?」

佳代「探しに来てくれたんだよね。」

弓弦「んにゃ、ちよい違う。」

佳代「うん?」

弓弦「迎えに来ました。」

佳代「弓弦君。」

弓弦「どうする、佳代さん。戻る? 戻らない? 佳代さんは、どうしたい?」

佳代「……私は、」

石田宅。

美和「陽人先輩が悪い。」  
陽人「おい、もっとオブラートに、」  
文香「はいはいブーメラン。」  
前田「すまないね、問い詰めてしまったかな。」  
文香「いえ、誰でも気になりますよ。むしろ来ていただいたのにこんな、すみません。」  
前田「いや、いいんだよ。人間いくつになっても、悩みは尽きないからねえ。」  
陽人「それは、本当に。」  
美和「先輩本当に悩んでるんですか？」  
陽人「おい。」  
文香「とはいえ陽人くんも言い方はあるでしょ。なーんで直球に聞いちゃうかな。」  
陽人「だから苦手なんだ！」  
美和「なら俺から話すとか言わなきゃいいじゃないですかあ。」  
陽人「それは、まあ。」  
文香「折れるなよ。」  
前田「まあまあ。今は佳代さんのことではないですか。」  
陽人「ええ。」  
美和「でも、ぶっちゃけ勝手にうじうじしてたのは向こうでしょ。」  
陽人「美和ちゃん。」  
文香「……なんてこと言うんですか。」  
美和「え……あ、ごめんなさい。」  
文香「わからないのに謝らないでください。」  
陽人「文香、落ち着いて。」  
文香「でも、」  
前田「気を遣われていたことを気にしているのでしょうか。」  
陽人「え？」  
前田「佳代さんですよ。」  
文香「それは、間違いないと思いますよ、あの子昔からそういう子だから。」  
美和「というより、親友なのに色々黙ってたことがダメなんじゃないですか。」  
陽人「ああ、それだ。」  
文香「でも先に黙ってたのは向こうだし。」  
美和「ほら。」  
文香「……。」  
美和「本当は奥さんもムカついてるんでしょ。」  
文香「は？」  
陽人「美和ちゃん、やめないか。」  
美和「ぶつからないからこうなったんじゃないですか。」

文香「それは、」

前田「……背が伸びるときには痛みが、心が伸びるときには悩みがあります。」

陽人「先生。」

前田「大丈夫ですよ。」

文香「はい。」

弓弦がやってくる。

弓弦「ただいまっす！」

陽人「おかえり。」

美和「いやこの人じゃないでしょ。」

文香「佳代は？」

弓弦「……駄目でした。」

陽人「そっか、ありがとうございます。」

文香「なんか、皆さんまで巻き込んで、すみません。」

前田「文香さん。」

文香「もうちょっと、私たちがしっかりしてたらいいんですけどね、こうやって口実を作らないと話し出せないとか、子どもかよって。」

弓弦「……あのさ。」

文香「お？どした？」

弓弦「最近、変わったお兄さんに話しかけられてさ！」

美和「あなたに言われるほどの？」

前田「それは興味深い。」

弓弦「うーん、辛辣。って、そうじゃなくてねん。」

陽人「どんな男なんです。」

弓弦「んー、郵便屋さんっぽいんですけど。」

文香「郵便屋？」

弓弦「服装がねー。で、時々すれ違っって、声かけられんの。」

前田「ほう。何と？」

弓弦「夢じゃないとかー、献身的？だとかー。」

文香「意味わからん。」

美和「献身的って使う相手間違っってませんか？」

前田「いえ、案外間違っってはないかもしれないよ。」

文香「それってやっぱり佳……」

弓弦「あー！そうじゃなくて！そういえばその人から花届けられたなーって。」  
陽人「花？」

文香「ああ、もしかしてさっき話してたドライフラワーのこと？」

美和「なにそれ。」

陽人「おい、そんなのも知らないのか？」

美和「先輩は黙っててください。」

弓弦「そうそう！ワンチャン、その人のいたずらかなーって！今思ったのよねん。」

美和「なんじゃそりゃ。」

文香「今する話じゃないね。」

弓弦「ええ。」

文香「いや割と大事な話ではあるけど。」

弓弦「でしょ！」

美和「何の話か分からないですけど、優しい店員さんの事はいいんですか。」

一同「……。」

陽人「振り出しだな。」

文香「あんたが言うか。」

美和「あー！もうじれったいなあ、こうなったら荒療治しかありませんよ！」

前田「荒療治？」

美和「前に進ませてくれるのは新しい恋しかありません！未練があるだけ奥さんに引け目があるだけ知らないけど、そんなこと忘れるくらい飛び切り熱い恋を……。」

文香「ちょ、ちょっと？」

弓弦「でたー、スーパー恋愛野次馬モード。」

陽人「なんだ、それ。」

美和（弓弦に）ほら、何ぼーっとしてるんですか！

弓弦「え、俺？」

前田「なるほど、考えましたねえ。」

文香「いや多分なにも考えてないと思いますけど。」

美和「好きなんでしょ！」

弓弦「え、ちょっと、」

文香「ちょっと待ってください、山下さん。」

美和「何ですかあ？」

文香「確かにいいアイデアかもしれないけど、」

弓弦「え？え？」

文香「根本の解決にはならないんじゃないかって。」

美和「そりゃそうでしょ。」

文香「え？」

美和「だって私恋愛以外どうでもいいですもん。」

文香「はい？あなたね、面白半分で……。」

美和「根本は、あなたたちの問題でしょ？」

文香「それは、まあ、はい。」

前田「ははは、いいじゃあないですか。」

文香「先生。」

前田「形だけでも、どうにかなるのなら。後は環境が背中を押してくれますよ。やってみるのも、いいんじゃないですか。」

文香「……。」

前田「簡単には壊れないでしょう、あなたたちは。」

文香「はい。」

弓弦「ちよ、ちよ、ちよっと何綺麗に収めようとしてるんすか！」

美和「はいはいはい！それでは作戦決行ですよ！チャラ男店員のプロポーズ大作戦！」

弓弦「プロポーズ!？」

文香「いや早いだろ。」

美和「それじゃ、告白大作戦！」

弓弦「それなら、まあ。……ん？」

美和「あ、やっぱ効果あるんだあ！」

文香「え、どういうこと？」

美和「ビジネスの常識ですよ！陽人先輩から教えてもらったんです！初めに無理なお願いをしてから本当に聞いてほしいお願いをするって！ね、陽人先輩！」

弓弦「いやちょっと待ってください！今のは！ノーカンでしょノーカン！てかなんで俺が佳代さん好きってことで話進んでるんすか!？」

美和「え、違うんですか？」

文香「違うの？」

前田「思い違いだったかな。」

弓弦「……。」

弓弦、一息つく。

弓弦「俺、そんなにわかりやすいっすか？」

美和「はい。」

文香「隠してたつもり？」

弓弦「いや、まあ、いや、みんなの前では、一応。」

美和「ふーん。」

文香「もしかして佳代と二人の時はあれ以上にわかりやすいわけ？」

弓弦「まあ、相手にはされないうすけど。」

文香「うわ、想像つくわー。あの子鈍感すぎるからね。」

美和「じゃあもう何も怖いものないでしょ、直球に行きましょう、直球に！」

弓弦「それとこれとは話が別じゃないですかあ。」

美和「へたれか。」

弓弦「うっ。」

陽人「あの。あのー。」

文香「ん？どうした、陽人くん。」

陽人「弓弦君って、佳代ちゃんのこと好きだったの？」

沈黙。

美和「いや先輩もか！」

文香「さすがに鈍感すぎるでしょ。」

美和「今までの話訳も分からず聞いてたんですかあ？」

陽人「そんなこと言われても。」

前田「陽人君、女性の勘は侮れませんからね。」

陽人「先生だって気づいてたくせに。」

前田「私は人を見る職業ですから。」

陽人「恋愛事情もですか？怖いな。」

前田「はっはっは。」

美和「まあいいや、文香さん。ここは女の絆でチャラ男店員に春を届けましょう！」

文香「え？あ、うん。結局やるのね。」

弓弦「ちよっと！俺良いつて言っつてな」

美和「四の五の言わず！はい、えいえいおー！」

文香「ん？あ、えいえいおー！」

弓弦「文香さんまで！」

美和「じゃあ準備しなきゃ。」

弓弦「何の！？」

美和「行きますよ！洗面台貸してください！」

文香「あ、はい。こっちです。……ほら、弓弦くん。」

美和・文香、弓弦を引っ張っていく。

陽人「……いい歳して、元気だなあ。」

前田「良いことじゃないですか。」

陽人「俺、気を回したり察したりするの苦手で。ああいう風にできるのが、羨ましいです。」  
前田「陽人くんの担任はしたことがないけれど、君はすぐくまっすぐな子だったからね。」

陽人「はは、先生は褒めるのがうまい。」

前田「今日皆さんの顔を見ることができて、ほっとしました。」

陽人「いやでも、こんな、見苦しいところを。」

前田「いいえ。何も力になれないのが悔しいですが、しっかり、自分の足で悩んでいる。それは一人間として非常に大切なことだと思います。」

陽人「どういうことですか？」

前田「一番ダメなのはね、悩みから目をそらして、蓋をして、誰かの正解を歩いていくことなんです。自分の足で歩けないのは、いけません。」

陽人「あ、なんかそれ全校集会で聞いたような。懐かしいです。」

前田「私の教育のポリシーですから。文香さんも陽人くんも、しっかりと歩いていて、ほっとしました。実は、少し不安だったんです。」

陽人「不安？」

前田「ええ。私も若い頃はただただ熱量だけの教師でね。自分にとっての理想の生徒像をいつも押し付けていました。」

陽人「理想の生徒像。」

前田「クラスには30人。それぞれ違うのに、全員におんなじ理想を押し付けて。縛り付けていたんです。檻みたいなものでした、教室が。」

前田「ははは、それなら嬉しいですが。私も色々失ってから気づきましたから。私の理想を、私の人生を生きさせようとしてはいけない、と。」

陽人「俺にとっては完べきな先生だったのに、先生もたくさん悩まれたんですね。自分の足で。」

前田「君も、言うようになったねえ。……ただ、だからこそ、なのかもしれません。」

陽人「うん？」

前田「佳代さんの事が、心配なんです。」

外。

佳代「……やっぱり別のものなのかな。なんなの、あの男。……この前贈ってきたやつって、もしかして。」

花屋か石田宅か迷いうろろする佳代。

佳代「今戻ってもな。」

ふいに、俊孝の言葉を思い出しドライフラワーが気になります。

佳代「……。香りを嗅いで、どうなるってのよね。」

おもむろにドライフラワーの香りを嗅ぐ。

暗転。

花屋前。勿忘草が綺麗なまま存在している。

美和と陽人が歩いている。それを眺める佳代。

佳代「え？どうしてここに？さっきまで……なんで、？」

陽人に貰った指輪を持つ美和。

美和「先輩、これ、良いんですか？」

陽人「ああ、別に。失くすなよ。」

美和「失くしませんけどお、もしかして経費ですか？」

陽人「……細かいことを聞くな。」

美和「バレたら大問題！って感じでしょう？」

陽人「あとで帳尻を合わせておくから。」

美和「まあ、先輩頭良いですもんねー。そこまで心配はしてませんよ。」

陽人「だろ？」

佳代「どういうこと？」

美和「先輩も同じの買ったんでしょ！奥さんにバレないようにしなきゃですよ！」

陽人「ああ、あいつ最近自分の体の事で精一杯だから、大丈夫だろ。うまくやるよ。」

美和「先輩も悪い男ですなえ。」

陽人「お互い様だろ。」

美和「冷たいなあ。」

佳代に気づく陽人。

陽人「……あ。（美和に）おい。」

美和「あ、はい。」

陽人「あれ、佳代ちゃんじゃないか、久しぶり。」

佳代「え、あ、いや。」

美和「知り合いですかあ？」

陽人「高校の時の後輩だよ。嫁の友達。」

美和「なるほど！」

佳代「あの、美和さんさっき……。」

美和「え？私の名前知ってるんですか？」

陽人「あれ、教えたっけ。」

佳代「いや、えっと。」

陽人「まあいいや、佳代ちゃん最近どう？お父さんのお店は、うまくいってる？」

佳代「え、まあ、はい。周りの人の支えで、何とか。」

陽人「そっか、良かった。佳代ちゃんは頑張り屋さんだからね。無理しないで。」

佳代「あ、ええ……。」

美和「先輩ったらやさしい。」

陽人「こら、あんまりからかうなよ。」

美和の携帯が鳴る。

美和「あ、部長からだ。ちょっと、出てきます。」

陽人「ああ。」

美和、立ち去る。

陽人「見てた？」

佳代「え？」

陽人「指輪。」

佳代「まあ、少し。」

陽人「そっか。」

佳代「あの……陽人先輩？」

陽人「ん？どうした？」

佳代「どういうことですか？」

陽人「ああ、いやだった？」

佳代「え？」

陽人「佳代ちゃんやっぱりまだ俺の事好きでしょ。」

佳代「え、ちょっと、だから」

陽人「それとも、文香が心配？」

佳代「それは、」

陽人「当たり前だよ。わかるよ。」

佳代「だったらどうして。」

陽人「ねえ佳代ちゃん。佳代ちゃんにしたら本当の事言える気がするんだ。」

佳代「本当の事？」

陽人「本当は、あの女の事なんかどうでもよくて。はやく距離を置きたいんだけど仕事上難

しくてさ。なんだかんだ絆されちゃって、ほんと俺って駄目だね。」

佳代「そ、そんな。」

陽人「断れないんだ。いつでもどこでも、良い顔して嫌われたくなくて。」

佳代「それ、」

陽人「佳代ちゃんと似てるでしょ。」

佳代「……。」

陽人「俺たち、おんなじだね。」

佳代「陽人先輩？」

陽人「佳代ちゃんがいてくれて、良かった。じゃあね、また連絡する。このことは、2人だけの秘密にしててくれないかな。」

陽人、佳代の頭をそっと撫でて美和を追いかける。

佳代「え、ちょっと。先輩。……先輩！」

あたりを静寂が包む。

佳代「どういうことよ。……どういうことよ。」

石田宅。小綺麗になった弓弦が告白の練習をさせられている。

弓弦「す、す、好き！ですか！」

文香「なんで聞いた。」

美和「一文字余計なんですけどお。」

弓弦「だー！やっぱ直球はきついです。てか俺まだ院生だしそういうタイミングじゃないっていうか……」

美和「うるさい。」

文香「言い訳しない。」

弓弦「いや、ええ。」

陽人「ほらほら、いじめない。」

美和・文香「あなたは黙ってて！」

陽人「はい。」

弓弦「弱いっす！男たち弱いっす！」

美和「もう、いつものチャラさは飾りですか？その勢いで言っちゃえばいいのに。」

弓弦「……そんな軽く言えるもんじゃないっすよ。」

文香「はあ。あんたも難しい人ねえ。」

前田「まあまあ、ゆっくりでいいんじゃないですか。お茶でも飲んで。」

弓弦「前田っち先生！」

陽人「その呼び名なんとかならないのか？」

前田「私は嬉しいですよ。」

文香「何でもかんでも許しちゃダメですからね！」

弓弦「大学の教授より厳しいっす。」

文香「そういえば、芸大って言っていましたね。」

弓弦「え、ああ、はい。」

美和「チャラ男も絵を描くのか。」

弓弦「それは偏見っすね。」

文香「どんな絵を描いてるの？」

陽人「女の子とか？」

美和「なんでそうなるんですか。」

陽人「え、いやボケたつもりなんだけど。」

文香「え、どの辺が？」

陽人「黙ります。」

弓弦「……あながち間違っではないっすね。」

文香「え？」

美和「きゃー！破廉恥！」

文香「何、絵の中でもチャライの？」

弓弦「ちよ、ちよつと待った、ちよつと待った！違うんすよ。芸術への誤解が凄いつす！女の子といっても……」

文香「といっても？」

弓弦「あれ？なんでしたっけ。」

美和「いやこっちが聞きたいんですけど。」

文香「気になるじゃない。」

弓弦「いやちよい待ち。なんかもやするっす。」

美和「はあ？」

陽人「まあ、そういうときもあるよね。」

弓弦「いや、うーん。大事なことのような気がするんですけど。」

インターホンが鳴る。

文香「あれ。誰だろ。」

陽人「俺、出てくるね。」

陽人、玄関へ。

美和「もう歳なんじゃないですか。」

弓弦「いやあなたより年下だと思っくんすけど！」

美和「女性に歳を聞くのか？」

弓弦「すみません。」

前田「ははは、家内と同じことを。」

美和「あ。」

前田「どうされました？」

美和「奥様に告白するとき、何て言いました？」

前田「ええ、私ですか？そんな何十年と前の事。」

美和「なにちよつと照れてるんですか。」

前田「いやはや、この歳になるとどうもこの手の話をしないのでね、ははは。」

弓弦「なんでまた前田っち先生に？」

美和「あなたの参考にならないかなっていう気遣いですよ、気！遣い！」

弓弦「ひえ」

佳代と陽人がやってくる。

陽人「ちょ、ちょっと佳代ちゃん？どうした？」

文香「佳代！？あんた、戻ってきてくれたの？」

美和「あ。」

弓弦「あ。」

美和「ちようどよかった！チャラ男店員から話が……」

弓弦「ちょ、ちよつとちよつと！」

佳代「文香。どうしよう。」

文香「佳代？どうしたの？」

佳代「浮気。」

文香「え？」

佳代「浮気してる。」

文香「は？ちよつと、話が見えてこないんだけど。」

佳代「あれ？でも陽人先輩も美和さんもここにいる。」

美和「どうしたんですか？ずっとここにいる告白の練習を、」

弓弦「あー！はい。二人ともずっとここにいましたよん。」

佳代「どういうこと？」

文香「こつちが聞きたいわ。」

佳代「やっぱり夢？」

文香「なんの話？」

佳代「でも夢じゃないって言ってたし。」

弓弦「夢じゃない？」

佳代「変な男が、」

弓弦「それって、」

美和「もー、全く話が見えてこないんですけど。」

弓弦「佳代さんもあの男に何か言われたんすか？」

佳代「弓弦くんも？」

文香「ねえ、佳代。落ち着いて、一から話してみな？」

佳代「……いや、やっぱり何でもないや。私が間違ってるのかも。」

文香「え？」

佳代「急にごめん。そういえば、」

文香「いつもそう。」

佳代「文香？」

文香「いつもそうじゃん、佳代はさ。何でもかんでも自分で勝手に解決して。自分が悪いって。」

陽人「こら、文香。」

文香「陽人くんは黙ってて。」

陽人「……。」

文香「ちょっとは自分の言葉で話せないわけ？いつも他人の顔色伺ってさ。」

佳代「顔色なんて……。」

文香「伺ってるよ。いつも我慢して、あんたはどこを歩いてるの？」

佳代「そんなこと言われたって。私はただ、」

文香「本当にそれが人のためだと思う？」

佳代「え？」

文香「ずっと佳代は言ってた。人のために生きることができるとなりたいって。でもさ、それって自分を捨てることじゃないよ。」

佳代「急に何、この歳になってまでお説教？」

文香「佳代が優しいのは私が一番わかってる。でもさ、時々その優しさがきついんだ。」

佳代「……。」

文香「陽人くんの事だって、」

佳代「文香！」

文香「言ってるよ。何でも。全部受け止めるから。私はそんなことで佳代を、」

佳代「それは文香の立場だから言えるんでしょ？」

文香「え？」

佳代「いいよね、文香は。私だって色々考えてるの。それを簡単に踏みにじらないで。」

文香「ちょっと、言い方考えてよ。」

佳代「いつもお姉ちゃん気取りでさ。そういうの、もういい。」

文香「は？」

佳代「わかってるよ、自分で。ちゃんとわかっている。……自分がいかにからっぽか。」

文香「……。」

佳代「陽人先輩と美和さんが一緒に歩いていたの。お揃いの指輪をして、それで。」

文香「なにそれ、うそでしょ？」

陽人「佳代ちゃん、急にどうしたんだ。」

美和「指輪なんて、」

佳代「やっぱり夢かも。」

文香「え？」

佳代「ただの私の、願望、なのかも。」

文香「佳代……。」

陽人「なあ、いくら佳代ちゃんでもそれは」

文香「ずっとそう思ってた？」

佳代「うん。そうかもね。そうかも。ひいたでしょ。幻滅したでしょ。嫌いになったでしょ。」

……だったら、もう私の事なんて忘れて。」

文香「ちょっと、佳代！」

佳代、走り去る。

弓弦「……俺は追いかけれません。すみません。」

陽人「弓弦くん。」

美和「なんか変なとぼっちり受けたんですけど。」

文香「あのさ。」

陽人「どうした？」

文香「少し前に変な男がうちに来て、浮気してるんだ！って言ってきたじゃない。」

陽人「ああ、あの意味の分からない奴のことか。」

文香「佳代も同じこと言ってた。」

陽人「お前、もしかして信じてるのか？」

文香「ち、違うよ陽人くん。そうじゃなくて、」

美和「もう先輩、浮気って言葉に飛びつかない。」

陽人「だって、」

前田「人の言葉は、不思議な力もちますからねえ。」

文香「先生？」

前田「良い言葉も悪い言葉も、人を動かしてしまう点では同じです。さながら、私たちはマ

リオネットのようだ。」

文香「……それでも、どう動くか決めるのは自分です。佳代には、自分で歩いて欲しいの。」

陽人「文香。」

文香「いつも私ばかりいい思いしてさ。私といて佳代は幸せなのかなーって不安になると

きもあった。でもずっと横にいてくれたから。私はね、私が言ったらだめなのかもし

れないけど、それでも、佳代には自分の足で幸せになって欲しいの。これって私の理

想かな。押し付けがましいかな。自分勝手、なのかな……。」

美和「ずっと気になってたんですけどお。」

文香「うん？」

美和「なんで、私を呼んだんですか？」

文香「ああ、それ。」

美和「やっぱり不安でした？塩撒いとこうって、思いました？」

陽人「だから美和ちゃん、それは」

文香「ちょっとは、あるかも。」

陽人「文香……。」

美和「ふうん、やっぱり。」

文香「でもね、そこまで深い意味はないですよ。ちょっと気にはなるけど、私は陽人くんを

信じるって自分で決めたから。自分の目で確認して、大丈夫だって思ったらそれでい

いから。自己満足。それだけ。」

美和「そうですか。」

陽人「なんか、ごめん。」

文香「よくわかっていのに謝らないでよ。」

美和「不安にさせてごめんな！俺は君一筋だよ！くらい言えないんですかあ？」

陽人「いまそういう空気じゃ。」

美和「バリバリそういう空気じゃ……。」

陽人「って、それより気にならないか。」

文香「その男のこと？」

陽人「ああ。ちょっと思ったんだけどさ。俺らの家に来たのと、佳代ちゃんや弓弦くんに話

しかけたの、同じ人じゃないかって。」

文香「やっぱり、陽人くんもそう思う？」

美和「私その話ついていけないので説明してください。」

前田「私も教えて欲しいな。」

陽人「ああ、はい、えーっと。どこから話そうか。」

文香「……陽人くん。それ、後ででもいいかな。」

陽人「どうしたんだ？」

文香「(弓弦を見て)……これ。」

落ち込み小さくなっている弓弦。

一同「……。」

俊孝が通り過ぎる。

花屋。店先に勿忘草はない。薄暗い店内、佳代が1人座っている。手にはドライフラワーが2本。

佳代「からっぽ。」

店のドアのベルが鳴る。俊孝が入ってくる。

佳代「すみません、今日はやってなくて……え？」

俊孝「悲しいですか。」

佳代「またあなたですか。」

俊孝「どうです、なかなか良いでしょう。」

佳代「何者ですか、あなた。」

俊孝「悲しいですねえ、昔はあんなにたくさん遊んだのに。」

佳代「意味の分からないことを仰らないでください。」

俊孝「……佳代さん。」

佳代「そもそもどうして私の名前を。」

俊孝「そんなことより、その花、気に入りました？」

佳代「そんなことって。……そうだ、これ、文香の名前で贈ってきたのあなたですよね？」

俊孝「どう思います？」

佳代「からかわないでください。」

俊孝「文香さんからののであれば開けてくれると思ひまして。」

佳代「はい？」

俊孝「どうしても、お届けしたかったんです。」

佳代「何のために。」

俊孝「そろそろお気づきでしょう。その花がもたらす効果に。」

佳代「……。」

俊孝「使うも使わないもあなた次第です。」

佳代「例えば。」

俊孝「はい。」

佳代「私がこの花を使うことで変な夢を、」

俊孝「夢じゃないです。」

佳代「……この花を使う選択肢をしても、」

俊孝「はい。」

佳代「それは私自身の選択ってことになりますか？」

俊孝「ええ、もちろん。自分の足で決めたこと。その事実は変わりません。」

佳代「そうですか。」

俊孝「自分でそう選ぶんです。ほら。」

佳代「……。」

俊孝「ここには何も苦しいものはありません。すべてあなたの思い通り。あなたを幸せにしてくれる。」

佳代「(操られたように花の香りを嗅ぐ。こうとする)」

俊孝「大丈夫、これはあなたが選んだ世界です。」

佳代「本当に、幸せになりますか？」

俊孝「もちろん。」

佳代、ドライフラワーの香りを嗅ぐ。

俊孝、奇妙に笑いながら去る。

石田宅。二人の会話を聞く佳代。

佳代「……。」

陽人「だから、違うって。」

文香「何が違うのよ。」

陽人「俺は断ったんだ、本当はこんなことしたくなくて。」

文香「それで？」

陽人「でも仕事では顔を合わせないといけなし、適当にあしらっていいところで終わらせるつもりだったんだ。」

文香「適当に？どこが？」

陽人「信じてくれよ、文香。」

文香「……。」

陽人「正直、自分が許せない。もっとはっきりしておくべきだった。仕事は仕事で割り切って、ほら俺上司だし？そこらへんはしっかりするべきだったって思う。」

文香「陽人くん。」

陽人「昔からこうだ。最低だよな。佳代ちゃんの事も。」

文香「それは……。」

陽人「俺、怖くて。」

文香「何が？」

陽人「嫌われるのが。臆病なんだよ、本当そこんとこずっと変わらなくて。変えなくちゃって思っているんだけど。本当、ごめん。」

文香「……。」

陽人「文香と結婚した時、絶対変わってやるって決意したはずんだけど。なかなかうまくいかない。もっと、強かったらよかった。こんな後悔で文香を悲しませて、最低だよ。」

文香「もういい、もういいから、陽人くん。」

陽人「文香。」

文香「ね、今日はもう寝よう？」

陽人「ダメだ、そんな簡単に許されるようなことじゃ、」

文香「大丈夫だから。ね。」

陽人「ごめんな。本当に、ごめんな。」

文香「ううん。ほら。」

陽人「……ありがとう。」

文香、去る。

陽人、ため息をつきかすかに笑う。

外。

美和「本当先輩って演技派ですよねえ。」

陽人「お前もなかなかだと思うけど。」

美和「ふふ、まさかいつも見てた昼ドラみたいなこと自分が経験するなんておもってませんでしたあ！こんな感じなのかあ、おもしろいなあ。」

陽人「そんな好奇心で俺に近づいてきたのか？」

美和「あ、ちょっとしよんぼりしたでしょ。」

陽人「してない。」

美和「しましたよお、先輩わかりやすいんだから！」

陽人「してないったら。こら。」

美和「ふふ。」

陽人「ま、心配するなよ。少し泣き崩れば一発だ。バカだから、裏の事なんて考えられないんだろ。」

美和「ひどいなあ、奥さんが聞いたら悲しみますよ。」

陽人「聞かれないから言ってるんだろ。」

美和「それもそうですね。」

陽人「あとは会社の奴に気づかれないようにしないと。いいか、会社ではあんまりくつつくなよ。」

美和「心得てますって。心配しすぎです！」

陽人「頼むよ。」

佳代「……。」

石田宅。

陽人「文香、ごめん。」

文香「……お父さんに話しておきました。」

陽人「そんな、でも、」

文香「いったい何があったの？こんなに借金して。」

陽人「部下の事が見捨てられなくて。」

文香「え？」

陽人「身体、壊してたんだ。治療費が必要だって。でも、家族と仲が悪いし、頼れる人がい

ないって、相談されて。」

文香「正気？」

陽人「はじめは、少しでも助けられるつもりだったんだけど、だんだん引き際がわからなくなってきた。足りない分はひとまず経費を使って。それをごまかすためにお金、借りて……。」

文香「何それ、信じられない。」

陽人「ごめん。でも、あんな、見過ごせなくて。嘘だとしても、助けられないよりはいいかなって、思っちゃって。」

文香「……。」

陽人「そうだ、お義父さんって昔……。」

文香「終わりね。」

陽人「え？」

文香「終わりよ、全部。」

陽人「おいどういことだ？」

文香「そのままの意味！」

陽人「説明してくれなきゃわからないだろ。」

文香「離婚しようってことよ。」

陽人「は？子どもはどうするんだよ。」

文香「借金するような人に心配されたくないです。」

陽人「だから、それは不可抗力で、」

文香「身体壊してるのもどうせ嘘なんでしょ？あんまり私を舐めないでくれる？」

陽人「本当だって。」

文香「ならその部下の人と合わせてもらえる？」

陽人「ああ、良いよ。いくらでも。」

文香「そう。」

陽人「いつにする？明日でもいい。会って本当だってわかったら考え直してくれるだろ？」

文香「どのみちそれが本当でももう意志は固まりましたから。」

陽人「おい。」

文香「明日までにサインしといてくださいね。」

陽人「……本当に話の分からねえ女だな。」

文香「え？」

文香に殴りかかる陽人。

佳代「……。」

陽人「ここまでバカだとは思わなかったよ。」

陽人、去る。泣き崩れている文香。

花屋。勿忘草はない。

佳代「……私、」

俊孝「あら、お早い。まだまだ浸っていてよかったですねえ。」

佳代「あんなに最低だったら、全部、諦めがつきます。」

俊孝「だから望んでいるんでしょう。」

佳代「え？」

俊孝「この花の香りを嗅ぐと理想の世界に行けるんですよ。」

佳代「なにそれ。」

俊孝「そのままの意味です。だから、すべて自分の思い通りに事が運ぶ。」

佳代「そんな、嘘です。私はあんな、陽人先輩の浮気とか、借金だとか、大体文香がかわいそうだし、」

俊孝「でも諦めはつくのでしょうか。」

佳代「え？」

俊孝「いつそあの男が最低ならば、すべてに諦めがついて前を向ける、そういうことですよ。ね。」

佳代「それは……。」

俊孝「私も同じことを考えていました。」

佳代「あなた、本当に何者なんですか？」

俊孝「……僕です。梶山俊孝です。わかりませんか。」

佳代「いえ。」

俊孝「そうですね。いやはや、仕方ありません。では、少し説明しましょう。」

佳代「……。」

俊孝「ふみちゃんと佳代ちゃんと僕。幼馴染でした。」

佳代「ふみちゃん？もしかして、文香のこと？」

俊孝「ええ。」

佳代「幼馴染って、私文香以外に知りません。」

俊孝「まあ、そうですね。」

佳代「そうですねって、なんで。」

俊孝「さあ。じきにわかります。」

佳代「え？」

俊孝「高校の時佳代ちゃんがあの男を好きになったときも、ふみちゃんとあの男が付き合いだした時も、佳代ちゃんのお父さんが亡くなったときも、卒業してからお店を継いだ時も、ずっとずっと僕は佳代ちゃんの事を見ていました。」

佳代「どういうこと？」

俊孝「……鈍感なところも、そのままです。」

佳代「それって、」

俊孝「僕の理想の話をしましょうか。」

佳代「あなたの、理想？」

俊孝「ええ。」

佳代「どんな理想ですか？」

俊孝「あなたとあの男が結ばれること。」

佳代「え？」

俊孝「最初はそう願っていました。」

佳代「最初は。」

俊孝「それでも、僕はそんな理想世界に行くことはできなかった。」

佳代「どうして？」

俊孝「本当は願っていなかったからです。」

佳代「そんな、意味が、」

俊孝「わからないでしょう。でも、そうなんです。……佳代ちゃんが幸せなら、僕はそれで良かった。だから、それならいっそあの男を最低のクズ男にしてふみちゃんと別れさせたいと思った。」

佳代「それ、私と同じって言った。」

俊孝「ええ、そうです。あなたと同じなんです。でも、人間とは強欲なものですね。僕はやっぱり、あなたと結ばれたかったんです。」

佳代「……え？」

俊孝「でも、どうしても、何度理想の世界に行っても、あなたは幸せにならなかった。僕がずっと、あの男と結ばれることこそが佳代ちゃんの幸せだと信じて疑わなかったから。僕にはあなたを幸せにする力はないと、心の奥底でずっと思っていたんですよ。」

佳代「さっきと言ってることが、」

俊孝「ええ、矛盾しています。矛盾しているからこそ制御できなかったんですよ。」

佳代「何を？」

俊孝「あなたを、です。」

佳代「私を。」

俊孝「正確には、理想世界でのあなたを。」

佳代「あの。さっき、幸せになれるって言いましたよね。」

俊孝「ええ。」

佳代「あなたは？」

俊孝「……。」

佳代「あなたは、幸せになれたんですか？」

俊孝「お話はここまでにしましょう。」

佳代「ちょっと、」

俊孝「大丈夫です。その花を使うことは、ちゃんと自分の意志ですから。」

佳代「待ってください、それを聞きたいんじゃないかとまだ聞けてないことがたくさん」

俊孝「またお会いできますよ、しばらくは。」

佳代「え？」

俊孝、去る。

石田宅。

文香「弓弦くん、ほらカリフォルニアロール！」

美和「私の分もあげますからあ。」

弓弦「そんな小学生みたいなの……。」

陽人「なんか、ごめんな。」

弓弦「その謝罪が一番心にくるっす。」

美和「デリカシーないなあ。」

陽人「ええ。」

前田「まあまあ。まだ何も始まってませんよ。」

美和「え？」

前田「告白大作戦のこの字もなかったですから。」

美和「え、意外とスパルタなんですかこの先生。」

文香「まあ、当時は厳しかったような。」

弓弦「この人たちみんな怖いっす。」

不自然な間。

文香「……あれ。そういえば何に悩んでたんだっけか。」

美和「え、正気？あの店員さんの……あれ？」

弓弦「なんか、俺も、なーんでこんなに落ち込んでたんだろ！」

陽人「え、ちょっと弓弦くん？……ん？」

美和「ま、気を取り直して練習の続き行きましょう！」

弓弦「ふあふい。ふおっふおふあっふえふあふあいつふ！」

文香「なんて？」

前田「ちよっとまってくださいっす！」

陽人「なんでわかるんですか。」

美和「ちよっとノリノリだし。」

俊孝が通り過ぎる。

花屋。勿忘草がある。

佳代「うん。うん。それは別れて正解だって。実家には連絡したの？」

文香「うん。した。」

佳代「そっか。辛かったね。」

文香「ごめんね、佳代」

佳代「なんで文香が謝るのよ。」

文香「ごめんね……。」

佳代「1人じゃ大変だよ、なんでも言って、私手伝うからさ。」

文香「やっぱり佳代がいて良かった。」

佳代「文香。」

文香「ありがとう。」

佳代「ううん、そんな。」

文香「あー。これからどうしようかなあ。とりあえず子ども生まれるまでは実家にいさせて  
らわなきゃ。」

佳代「陽人先輩は、どうなったの？」

文香「さあ。会社は解雇されてるみたいよ。後は知らない。あの後輩とどうなったのかも。」

佳代「そっか。そうだよね。」

文香「こんなに最低な人だとは思わなかったなあ。」

佳代「本当に！もったいい人だと思ってたのに。許せない。」

文香「だねー。あーあ、生きてればこんなこともあるもんだなあ。」

佳代「ちよっと、文香そんなに強がらなくても。」

文香「強がってないよ。強がってない。」

佳代「文香……。」

勿忘草が不気味に鎮座する。

暗転。

石田宅。

陽人「じゃ、行ってくるから。」

文香「うん、行ってらっしゃい。」

陽人「何かあったら仕事中心か気にせず連絡してくれよ。」

文香「もう、大丈夫よ。ありがとう。」

陽人「じゃ。」

陽人、文香とお腹の子どもに挨拶をして出かける。

文香「(子どもに)さー、お父さん行っちゃったねえ。」

陽人の会社。

陽人「おはよう。」

美和「あ、先輩！おはようございます。」

陽人「朝から元気だね。」

美和「まあ、暗いよりはいいじゃないですかあ。」

陽人「まあね。」

美和「この間ありがとうございました。」

陽人「ん？ああ、こっちこそ呼びだしてすまなかったな。嫁も楽しかったって言ってたよ。」

美和「そうですね？良かったー！泥棒ネコって言われなくて。」

陽人「だから人の嫁の事どう思ってるの。ほら、仕事。」

美和「はあい。ってまだ始業前なんですけど。」

陽人「誤差誤差。」

美和「うわあ。」

花屋。勿忘草はない。ドアにつたが絡まっている。

佳代「……うーん。寝すぎたな。」

店先に出る佳代。

京子がやってくる。

佳代「あ、京子おばちゃん。おはようございます。」  
京子「……。」

佳代「京子おばちゃん？」

京子「あなた、どちら様？」

佳代「……え？」

京子「うーん、どこかで見たような見てないような……。どこかでお会いしたかしら？」

佳代「やだな京子おばちゃん、またからかってます？」

京子「ごめんねえ、最近物忘れがひどくて。ちよっと思いい出せないわ。」

佳代「ちよ、ちよっ京子おばちゃん！」

京子、去る。

佳代「どうして……。」

佳代、花屋に目をやる。つたが絡まり廃れている。

佳代「え？」

俊孝がやってくる。

俊孝「ああ、忠告が間に合いませんでした。」

佳代「ちよっど、どういうことですか？」

俊孝「……いえ、なんでも。」

佳代「何を隠しているんですか？」

俊孝「大丈夫ですよ。」

佳代「何がよ！……わかった、ここ現実世界じゃないんですよ。だから色々おかしいのよね？ね？」

俊孝「さあ、あなたはどう思います？」

佳代「おちよくってるんですか？」

俊孝、奇妙に笑いながら去る。

佳代「何よ……。」

弓弦がやってくる。

佳代「あ、弓弦くん！弓弦くん、私！わかる？」

弓弦「えーっと、どうも……。」

佳代「弓弦くん？」

弓弦「どっかでお会いしましたか？」

佳代「そんな、弓弦くんまで。」

弓弦「すみません、俺急いでるんで。」

佳代「あ、ちょっと。……いつもと違う。」

佳代、携帯をとる。

佳代「お願い……。」

前田が電話を取る。

前田「はい、前田です。」

佳代「あ、先生！水戸です。水戸佳代です。先日はありがとうございます。」

前田「水戸さん？はて、存じ上げませんねえ。間違いではないですか。」

佳代「そんな、先生、あの、」

前田「すみません、会議があるもので。」

電話が切れる。

佳代「……。」

ドライフラワーに目をやる佳代。

佳代「文香……は今大変なんだっけ。いや、それはこっちの話じゃないのか。こっちだと喧嘩してるんだっけ。いや、それは向こうの話？どっちだっけ……ああどうしよう、わからない……何が起きてるの。」

ドライフラワーを手にする佳代。

佳代「みんな私を忘れているの？それって私が望んだことだっけ。どう、だっけ……。」

舞台上、4分割。

文香と陽人、弓弦と京子、美和、前田がマネキンのように立っている。

佳代「ねえ、どうして覚えてないの。」

前田のもとに行く佳代。

佳代「ねえ先生。お父さんが死んだとき、あんなに支えてくれたじゃない。」

前田「さあ、人形にはわかりません。」

佳代「……！」

美和のもとに行く佳代。

佳代「勿忘草、気に入ってくれたじゃないですか！ほら、ナメクジがいて、」

美和「さあ、人形だからわかりませーん。」

佳代「……。」

文香と陽人のもとに行く佳代。

佳代「文香、ごめん。文香。もつとちゃんと自分の気持ちぶつけたらよかったね。陽人先輩

も、ごめんなさい。最低な願い事をして、ごめんなさい……。」

文香「さあ、人形にはわからないな。」

陽人「さあ、人形にはわからないな。」

佳代「……。」

弓弦と京子のもとに行く佳代。

佳代「ほら、弓弦くん！また一緒に花束作る練習しようよ！カリフォルニアロールもさ、私

覚えたんだよ！ねえ、京子おばちゃんもさ、一緒にまた歌おうよ……。」

京子「さあ、人形だからわからないねえ。」

弓弦「さあ、人形だからわからないっすねえ。」

佳代「……。」

全員が佳代を取り巻きかごめかごめのように動き回る。

佳代「どうして？どうして？お願い、私が悪かったの。お願い、みんな思い出してよ！」

無表情で佳代の周りを回る一同。

佳代「お願い、どうか私を忘れないで……。」

依然として回る一同。

佳代「勿忘草。私の勿忘草はどこ？」

徐々にゆっくりになる一同。

佳代「私の、居場所は、」

ゆっくりゆっくり、佳代を縛り付けるように回る。

佳代「私の、お父さんの、大事な場所なの！ここだけは、なくなっちゃいけないの……。」

やがて動きが止まる。人形たちに埋もれる佳代。

遠く、俊孝が通り過ぎる。

廃れた花屋前。勿忘草はない。

俊孝と佳代が立っている。

俊孝「お花、使ったらどうです。もうこっちは居場所はありませんよ。」

佳代「嫌です。嫌ですよ……。」

俊孝「どうして？」

佳代「理想はあくまで理想ですから。」

俊孝「それでも、そっちを現実だと思ふのなら現実になるとは思いませんか？」

佳代「……わかりません。でも、違うと思うんです。」

俊孝「ほう。」

佳代「あなたがなぜその花に固執するのも、何もわかりませんが。」

俊孝「……。」

佳代「なんでも自分の思い通りだとしても、それはただの幻想でしかない。」

俊孝「幻想？そんなことありません。あなたも実際に顔を見て声を聞いたでしょう。」

佳代「幻想ですよ。確かにとっても心地が良いけど、でもずっといる場所じゃない。現実に戻るときもまた空虚なまま。」

俊孝「どうして」

佳代「生きてるから。」

俊孝「え？」

佳代「私たち、生きてるから。」

俊孝「何を、当たり前のことを。」

佳代「だってね、生きてると痛いんですよ。」

俊孝「……。」

佳代「喧嘩して、好きになって嫌いになって、好かれて嫌われて。思い通りにいかないこともあって、むしろそっちの方が多くて、痛くて、それでもね、だからね、生きてるんですよ。」

俊孝「佳代さん。」

佳代「なんでも思い通りならどっこも痛くないです。でも、誰の心にも残りません。」

俊孝「……。」

佳代「全然自分の選択じゃなかった。ダメでした、本当に、私。」

俊孝「佳代さん、もうやめませんか。あなたは何も痛い思いをしないまま、幸せであればそれでいいんですから。」

佳代「あなたの理想を押し付けしないで。」

俊孝「佳代さん……。」

佳代「文香の言ってることがわかりました。私、まだまだ全然子どもでした。前に進まな  
きゃ、自分の足で。」

俊孝「でも、もうみんなあなたの事を忘れていきますよ。もう戻れはしません。」

佳代「戻ります。」

俊孝「え？」

佳代「戻ってみせます。」

俊孝「何を言って、」

佳代「理想世界に浸りすぎたから、こうなったんですよね。」

俊孝「……ええ。」

佳代「……戻ってみせますから。」

佳代、去る。

俊孝「何を、無謀なことを。」

俊孝、反対方向にゆっくり去る。

石田宅。佳代がやってくる。  
インターホンが鳴る。

陽人「はい。」

文香「こんな時間に？」

陽人「ちよっと、出てくるね。」

文香「うん。」

陽人、玄関へ。

佳代「陽人先輩。」

陽人「えっと、どちら様？」

佳代「水戸佳代です。高校の時の後輩の。あ、文香の親友の、」

陽人「わからないな。文香！文香！」

文香がやってくる。

文香「どうしたの？」

陽人「文香の親友って言ってるけど……。」

文香「え？……すみません、どなたですか？存じ上げませんので、お引き取りください。」

陽人「やっぱそうだよね。すみません、それじゃ。」

佳代「あ、ちよっと、」

佳代「ダメか……。」

佳代「やっぱりもう戻れないのかな。お父さんの花屋も、もうなくなっちゃうのかな。」

あーあー、馬鹿だなあ、私。本当に、馬鹿。」

廃れた花屋の前。勿忘草はない。弓弦がスケッチブックを持って座っている。思わず声をかける佳代。

佳代「弓弦くん。」

顔をあげる弓弦。

弓弦「……？」

佳代「ああ、すみません。……絵、お上手なんですネ。」

弓弦「あ、ああ、これっすか？まだまだっすよ。学校の課題でね、描かなくちゃで。」

佳代「ここで。」

弓弦「すみません、邪魔でした？」

佳代「いや、全然。ちよっと、見てもいいですか？」

弓弦「え？ああ、いや、そんな大したことないですよ。」

佳代、スケッチブックを持つ。

佳代「え……？これ、勿忘草を持つ女の人……。」

弓弦「え、よくわかりましたね！花の名前！」

佳代「いや、あの。実は花屋をやっつて。」

弓弦「ほーん、どうりで。」

佳代「あの、あの！」

弓弦「どうかしましたん？」

佳代「この女性誰ですか？」

弓弦「うーん、それがねえ、俺もよくわからないうちに描いてたっつていうか、なんていうか。

感覚？っつてやつ？気づいてたら描いてたのよねーん……っつてなんかお姉さんに似てな

い？」

佳代「うん……そう、思っつて。」

弓弦「え！うわー！え？なんか恥ずかしいっす！ちよい返して！」

佳代「え、ちよっと。」

弓弦「うわー、見れば見るほど似てるっつてか、うん、なんだこれ、運命っつてやつっすかね。」

佳代「いや弓弦くんそれはちよっとイタイ。」

弓弦「てか俺の名前。」

佳代「あ、いや！えっと、あはは。」

弓弦「まあいいや。ほかにも花を描こうと思っつてねん、ここが良い場所だったから陣取っ

ちよったつす。昔花屋だったみたいっすけど、なんでまたなくなっつちよったんですか

ねえ。」

佳代「……なんで、だろうね。」

弓弦「花っつて、良いっすよね。」

佳代「え？」

弓弦「見るだけで笑顔になんの。花っつてやっば人を笑顔にするもんなんすねえ。」

佳代「……。あのさ、弓弦くん。学校の課題、どういう内容なの？」

弓弦「え？これっすか？あー、なんか、えっと、そのー、自分の『大切な』何かを描けって  
漠然と。って、さっきの事もあったからやっぱなんかはずいっす。」

佳代「え……。」

弓弦「どうしました？」

佳代「それ！弓弦くん！それ、私にください！」

弓弦「え、ちょい急に！？」

佳代「ダメですか？」

弓弦「いやでも提出しなきゃだし、まだ途中だし！」

佳代「お願い、弓弦くん。」

弓弦「ちょい、ちょいお姉さん！」

佳代「お願い。」

弓弦「うーん。」

佳代「なんなら買い取るから！言って！いくらでも！ほら！」

弓弦「え！？え！？うーん、えっと」

佳代「ほら、早く！」

弓弦「うーん、五万円！」

佳代「もう一声！」

弓弦「に、二十万円！」

佳代「まだいける！」

弓弦「ひゃ、百億万円！」

佳代「のった！」

弓弦「いや、あの、どうしてそんなに。」

佳代「『そこまででもして欲しいってことだよ、弓弦君って鈍いよなあ。』」

弓弦「『アイスられてる？』……ってえ？あれ？佳代さん？」

佳代「え……。」

弓弦「あれ、佳代さんここで何して……あれ？俺も何してたっけ。」

佳代「弓弦くん！弓弦くん！待ってたよ、待ってた。」

弓弦「え！？ちょっと佳代さんどうしたのさ。」

佳代「弓弦くん……ありがとう。」

弓弦「俺何しました？あれ？なんか、」

佳代「弓弦くん……。」

弓弦「ちょい待ち佳代さんちょっと離れて、って待ってくださいなんで泣いて……。」

佳代「私、ちゃんと、歩く。」

弓弦「え？」

佳代「自分の足だよ。ちゃんとね、歩くから。」

弓弦「佳代さん……。」

佳代「……それ。」

弓弦「え？うわ！ちょっと！なんで佳代さん見てるんすか！？完成してからあげようと思  
ったのに！」

佳代「え？」

弓弦「え？ああ、うーん。……花。あげようと思って。」

佳代「私に？花を？」

弓弦「花束はまだ不格好だから得意分野を生かそうと思ってねん。花と佳代さんの絵、プレ  
ゼントしようとして。ほら、ね？なんかこう、粹でしょ！？佳代さんに花をあげ  
るって！ね！」

佳代「ちょ、ちょっと待ってまた急に熱くなって……。」

弓弦「……粹でしょ？」

佳代「そういうことにしといてあげる。」

弓弦「ええ、ちょっと佳代さん。」

佳代「ほら、こんな暗いところで描いたら目、悪くなるよ。」

弓弦「めっちゃ街灯っすけど。」

佳代「……いいから帰るの！」

弓弦「もしかして照れてるっすか？」

佳代「は？」

弓弦「すみません。」

佳代「……ねえ弓弦くん。」

弓弦「はいっす！」

佳代「私、話してみる。」

弓弦「え？」

佳代「文香と、陽人先輩と。頑張って、自分の言葉で、向き合ってくる。」

弓弦「佳代さん。」

佳代「自分の花も、育ててみようかな。」

弓弦「お、いいっすね！佳代さんが自分の育てようだなんて、珍しい！何にします？  
やっぱり……」

佳代「弓弦くんが描いてくれた勿忘草。私みたって前田先生も言ってたから。ちょうど店  
先のも割れちゃったしね。」

弓弦「結局店のためじゃないっすかあ。」

佳代「自分のためよ。だってここ、私のお店だもん。」

弓弦「……じゃ、俺もなんか手伝うっす！」

佳代「植木鉢、割らないでよ？」

弓弦「失敬な！」

佳代「じゃ、そろそろ帰りなね。」

弓弦「そうねん。明日も早いし。」

佳代「また、ね。」

弓弦「はいっす！んじゃ！」

弓弦、去る。

佳代「……。」

佳代、店内へ入る。ドライフラワーを手に取る。

俊孝がやってくる。

俊孝「やはり、必要なんでしょう。」

暗転。

花屋。店先に勿忘草が咲いている。佳代と弓弦が作業をしている。

弓弦「綺麗に咲きましたねえ。」

佳代「そりゃ私だから。」

弓弦「さっすが！」

佳代「そこは突っ込んでよ！」

弓弦「いや佳代さんのボケわかりにくいっす！」

佳代「ちゃんと、自分で育てたからね。」

弓弦「うん。」

佳代「咲いてよかった。」

京子がやってくる。

京子「ごめんください。……ごめんください。」

佳代「あ、京子おぼちゃん、」

京子「良かった、今日も見えてるみたいね。」

佳代「ちよつと、毎日それ確認するのやめてくださいよ、カウントダウンみたいで怖いから。」

京子「あらあ、この歳になると冗談でも言ってなきややってられないのよお。」

佳代「それいつも聞いております。」

弓弦「あー！京子ちゃん！今日もかわいいね！」

佳代「うっわ。」

京子「あらあ。」

佳代「本気で照れないでくださいよ。」

弓弦「あ、これ聴く？」

京子「あら、新しいレコード？」

佳代「CDね。」

弓弦「今回は、'Lemon-」

京子「リンゴ。」

佳代「いや絶対聴こえてたでしょ。」

弓弦「(鼻歌)」

京子「あら、それは聴いたことあるわ。(鼻歌)」

佳代「……。」

間

佳代「いや歌いませんよ!？」

弓弦「えー佳代っちつまんなーい。」

京子「佳代っちつまんなーい。」

佳代「佳代っちは忙しいんです!ほら、」

陽人と美和が駆け込んでくる。

美和「きゃー!」

陽人「うおおおおお!」

佳代「ひっ」

弓弦「い、いらっしやいませ?」

佳代「いらっしやいませ?」

京子「いらっしやいま……ああ、心臓が止まるかと。」

佳代「シャレになりませんから。」

弓弦「てか二人そろってどしたのん?お仕事は?」

佳代「そうですよ、いきなりなんなんです?」

息を整える二人。

陽人「た、たまたま、たまたまたまたま」

美和「はー、はー、バグらないで下さい、先輩。」

佳代「あのお。」

陽人「うま、うま、」

弓弦「馬!?!どこっすか!?!」

京子「大変、捕まえて乗らなきゃ。」

佳代「あーもう突っ込み追いつかんからボケるな。」

美和「たまたまこの近くを外回りしてたんですよ。」

佳代「ほう。」

美和「そしたら、先輩の携帯が鳴って、」

陽人「文香が、文香が、文香が……。」

佳代「え!?!文香に何かあったんですか!?!どうしたんですか!?!」

美和「あー、もう先輩伝え方!」

陽人「文香が……生まれる。」

佳代「え!?!」

弓弦「また爆誕するんすか?」

美和「だー!なんとなく察してください!」

佳代「え、まさか……。」

弓弦「文香さんのお子さんが……。」

京子「爆誕ね！」

陽人「そ、そ、そうです。」

美和「ほらもう何やってるんですかあ。」

佳代「てかここにきてる場合じゃなくないですか？」

弓弦「そそそそ、そうですよ！！病院！行ってあげないと！」

美和「ほら！だから言ったじゃないですか、先輩！早く行った方が、」

陽人「ど、ど、どうす」

佳代「あーあー、ちょっと私も行きたい。」

弓弦「え！？ちょっと、じゃあ俺も！」

京子「……私も！」

美和「いや病院絶対迷惑。」

佳代「職場には連絡したんですか？」

美和「私が。だから今から行って大丈夫ですよ。」

陽人「ひ、一人は緊張する……。」

美和「あんたもヘタレか。告白大作戦すっぽかしたチャラ男と同類すぎる。」

弓弦「飛び火！」

佳代「告白？」

弓弦「あー！わー！ってこんな話してる場合じゃあないっす！絶対！」

陽人「よ、よし！みんなで行こう、そうしよう！」

佳代「ちょ、ちょっと待って、じゃあ準備してくる！」

陽人「あ！前田先生に電話しよう。」

美和「今やることですか！？」

佳代「ちょっと、それは後に……もう、聞いてない。」

美和「はあ。」

遠く、前田が電話に出る。

あわただしく病院に向かう一行。

全員ハケる。

俊孝が出てくる。ひもに絡まっている。

首を吊られる。